

学習塾は、主体的に学ぶ力を育てよう
—学習塾の社会的使命(ミッション)を考える—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：林さんは、学習塾の社会的使命、ミッションは何だとお考えですか。

A：自分から進んで学ぶ力、つまり、「主体的に学ぶ力」を育てることだと考えます。なぜなら、学力とは、「主体的に学ぶ力」であると考えからです。

塾生が学習塾で学ぶ理由は、学校成績の向上と希望校合格です。ただし、本気で、学校成績を向上させ、希望校合格を果たすには、学習塾の授業を受けるだけでは不十分です。自分から進んで学ぶこと、主体的に学ぶことが必要不可欠です。

自分から進んで学ぶ力、「主体的に学ぶ力」は、上級学校でも、高校を卒業して、大学、短期大学、専門学校、専修学校、大学院など高等教育機関に進学した後も必要不可欠です。また、学校を卒業後、社会に出て、仕事や社会的活動をする際にも欠かせません。生涯を通して学び続け、充実した人生を送る上でも絶対必要です。

Q：確かにそうですね。その「主体的に学ぶ力」を育成することが学習塾の社会的使命だと、林さんは考えるのですか。

A：その通りです。学習塾は、たとえ夏期講習会など短期間ではあっても、自分の塾の塾生である間に、自分から進んで学ぶ力、「主体的に学ぶ力」を育てることにより、学校成績の向上と希望校合格という、塾生の入塾理由の達成を目指すべきと考えます。

Q：そんなことができるのですか。林さんが塾長を務める開倫塾では、主体的に学ぶ力を育てるためにどのような取り組みをしていますか。

A：開倫塾は、教育目標の一つに、「自己学習能力の育成」を掲げております。また、「学力」を「主体的に学ぶ力」と「定義」しております。そこで、「主体的に学ぶ力」を育成することを、「開倫塾の社会的使命（ミッション）」と考えます。

自分から進んで学ぶ、主体的に学ぶために最初に取り組むべきは、「自覚をもって学ぶ」ことです。

開倫塾は、「教育効果を決定する要因」を、「本人の自覚」と「先生の力量」と考えます。ただし、この「自覚」は本人がする性格をもちますので、先生の関与の仕方が課題となります。開倫塾では、「自覚」は本人がするものではあるが、先生は、自覚が不十分な塾生に本人の「自覚を促す」役割を果たすべきと考えます。

開倫塾では、本人の「自覚を促す」ために、毎回の授業中に3分間以上の「武者語りの時間」を設け、「自覚を促す」ようなお話をすることを奨励しています。

今、自分はどのような立場にいるのか、何のために進学をするのか、進学をしてどのようなこ

とを学びたいのか・したいのか、社会に出てどのような仕事に就きたいのか・社会的な活動がしたいのか、どのような充実した人生を送りたいのか、よく生きたいのか。これらについて、少しずつでも自分の力で考え、行動するよう、「自覚を促す」取り組みをしております。

Q：「主体的に学ぶ力」は、「自覚を促す」だけで身に着くのですか。

A：効果の上がる「学習方法」を身に着けることも欠かせません。開倫塾では、学習を「理解」「定着」「応用」の「3つの段階」に分け、各々の段階にふさわしい学習方法を、「開倫塾の学習の3段階理論」として、創設以来38年かけて少しずつ取りまとめ、塾生の皆様に、参考までにとお示ししています。

たとえ1～2週間の夏期講習会だけの塾生であっても、開倫塾の塾生である間に、「学習の3段階理論」を参考に自分なりの学習方法を身に着け、これからの学校や社会での学習に役立てていただきたい。そのために開倫塾は存在すると考え、かなり熱心に、一人一人の塾生の学習方法の指導に取り組んでおります。

各学習塾でも、塾生の参考になると考える効果の上がる学習方法を取りまとめ、お示しになっていると思います。

Q：「学習の3段階理論」ですか。面白そうですね。「主体的に学ぶ力」を育てるために取り組むべきことは、他にもありますか。

A：「読解力」を育てることです。教科の内容を事細かに指導し、学習させることも大切ですが、そもそも「読解力」が欠如していると、問題で何が問われているかを読み解くことができません。

また、長文化する入試等の問題文を、最後の問題まで正確に、また、論理的に読み解くこともできません。「読解力」なくして、「主体的に学ぶ力」は考えられません。

<辞書の活用>

「読解力」の前提は、身に着けている「ことばの数」「語彙数」です。開倫塾では、意味のよくわからないことばがあったら、「気持ちが悪い」と考え、必ず辞書で調べることを。辞書で調べたことは、ノートやカードに書き写すこと。書き写した内容は、できるだけその場で覚えること。意味調べノートやカードは、折に触れて初めから読み直し、辞書で調べたことばはすべて身に着けることを奨励しています。「ことばは力」と考えるからです。

<新聞の活用>

新聞は、地域や日本、世界で何が起きているかを、事実をもって示し、問題があれば警鐘を鳴らし続ける「社会の番犬」「社会の公器」です。

新聞を毎日なめるように一面から読み続け、なぜこのようなことが起こるのだろう、ではどうしたらよいかをじっくり考えると、「自分で考える力」「批判的思考（クリティカル・シンキング）能力」が身に着くと考えます。興味のある記事を切り取り、スクラップブックを作り、自分の考えを書き記すことも素晴らしい勉強になります。新聞は、新しいことを速く、正確に、論理的に読み解く力を短期間で身に着けるのにも、極めて効果的です。

<読書の活用>

各教科の教科書で紹介されている本や著者の作品を中心に、じっくり読書に励むことは、「思慮深さ」「省察力」と同時に、「読解力」も育みます。

本を読んで、気に入った文章や表現に出会ったら、「書き抜き読書ノート」に書き抜き、一生を通じて、折に触れて読み返すと、教養と同時に人格の基礎を築くきっかけにもなります。

Q：最後に、一言どうぞ。

A：企業としての社会的使命（ミッション）を深く自覚し、自分が生み出す製品・サービスの改善とイノベーションを徹底的に行い、磨きこみ続けた代表者が、アップルの創業者であるスティーブ・ジョブズと考えます。

起業家精神とは何か、イノベーションとは何かをお知りになりたい方はもちろんのこと、毎日、手から離れないほど親しんでいるスマホがどのように造りこまれたのかをお知りになりたい方は、ウォルター・アイザックソン著「スティーブ・ジョブズ」全2巻、講談社 2011年11月1日刊を、がんばって最後のページまでお読みください。

ご自分が経営なさる、また、経営幹部をお務めになる学習塾の社会的使命（ミッション）をお考えになる上で、参考になると確信いたします。

2017年7月6日（水）10時01分